

次世代に継承すべき伝統

加藤 良二

東邦大学医学部外科学講座（佐倉）教授

佐倉病院病院長

2000年に東邦大学医療センター（当時は医学部付属）佐倉病院外科に赴任して14年が過ぎた。初めの頃は、手術件数を増やさなければと昼夜を問わず手術室にいた。佐倉外科を発展させねばという思いで、医学部、ましてや東邦大学のことなど二の次であった。やがて教授となり教授会で大森に通うようになった。次第に医学部を意識するようになり、佐倉の教室に若い力が欲しくて授業や臨床実習の機会を強く望んでいたが、うまくかわされて頻繁には大森へ行けなかった。管理担当副院長となってからは、大学法人を意識せざるを得ず、病院長代行などで法人本部、医学部へと目を広げるようになった。一昨年、病院長になる頃から私学と国公立の“伝統”の違いを改めて考えるようになった。

Wikipediaによると「伝統とは、人間の行動、発言、思考及び慣習に見出される歴史的な存在感を総称していう。または、人間の生存・生活の中に長い歴史を通して表される種々の慣習や形式、価値観を総体的に指し、狭義には、個々の集団が個別に有する慣習、形式、価値観を指す。伝統はまた、それまでの歴史の中で形成されて来た種々の形態の中から、特に重んじて次世代に継承すべきものに対する精神的な立場を指す」とある。さらにこれには「政府、地域、家族、国民・民族、神」などさまざまなものを主体とする“伝統”があるらしい。

まず私学には、開学に至る経緯によって理想とする理念（精神的な立場）がそれぞれの大学にあり、これを守り続けているということに気づいた。素晴らしいことである。

国公立大学の医学部には、一律に「医学を以て国民を救う使命」が国によって与えられたと理解している。これは単に医師としてなすべきことであり、人としての生き様や社会との関わりについての“精神的な立場”“基本理念”を表したことはない。群馬大学医学部出身の私は、東邦大学に来て初めて、自分の中でくすぶっていた理念に触れた。

東邦大学は、帝国女子医学専門学校を前身とした医学部に加えて、看護学部、薬学部、理学部の4学部を擁しており自然科学系大学として社会に貢献することを基本理念としている。学祖である額田晋先生の著した「自然・生命・人間」(1957年)の中で好きな言葉がある。

しずかに自分の心を大自然の偉大な力に通わせながら
人間として生きられるだけ生き
そして社会のために人類のために
はたらけるだけ働いてみようではないか

かくありたいと思い、医師をめざしてきた自分の生き方に通じるものがあり、東邦大学に来て良かったと思っている。国公立大学医学部にはない建学の精神である。これは「国民・民族を主体とした伝統」(wikipedia)に通じる。言い換えると東邦大学の医師としての「民族生活の種々の形態（言語・習慣・制度・信仰）の総称を指す」(wikipedia)。東邦で生まれた医師を主体とする伝統について、「施術からの呼び声」および「施術への決意」にかかわる気遣いを、開学以来90年の歴史のなかで堆積してきた。そして、どういう気遣いがいかなる状況の下で成功したり失敗したりするものであるかについての判断力が、“伝統”と呼ぶべき東邦大学の精神のなかに、蓄積されている。であるから、その歴史的な精神の蓄積に気分、体験そして思索を通じて触れることができるなら、医療をめぐる生ずるさまざまな出来事（大学間、学部間、診療科間、病病連携、病診連携など）はなかなか素晴らしいものとなる。困ったり、迷った時には学祖の言葉を思い出し、大学で培われてきた精神に心の耳を傾けて判断すれば良い。

また私学を中心とした全世界に誇るべき日本の医療は、経済中心の社会、過剰な報道や国民の期待による破壊を受け、地域医療の衰退と共に、その存続が危惧されている面もある。しかし、今ある医療制度や大学教育における改革の波は、東邦大学が「いかなる医療人を育て社会に貢献するか」をめざしてやって来たことと志を同じくするものであり、おそれるものではない。

「自然・生命・人間」は、東邦人として生きていくうえで必要な理性や宿命の理解への拠り所であり、これからの歴史の中でさらに大切にされ、さまざまな場面で形成されつつ次世代に伝承されて行くことが“伝統”と呼ぶにふさわしいものであると確信する。